

最終話 蔵書処分の最終形態「一人古本市」挙行！（下）

●処分する要諦は「えいやっ！」

前回、蔵書を大量に処分するための方策として、七月十四から十六日の三日間、たった一人で古本市を開くことを考えたということを書いた。場所は東京西郊の文教都市・国立にあるギャラリー「ビブリオ」。つい最近まで人が住んでいた木造二階家の民家だ。オープン前のイベントというかたちで貸してもらえることになった。準備は約一カ月。何をすれば開催にこぎつけるのか、探り探りのスタートとなった。

告知等は、まずチラシを刷って、知り合いの古本屋に置いてもらい、自分が日々書いているブログで何度か繰り返し宣伝することにした。ギャラリーのオーナー・十松くんは、祖父の代からの国立市民で、地元では顔も広い。その人脈を使って、ポスターを貼ったり、チラシを配布するなど、精力的に動いてくれた。

「一人古本市」と言いながら、とても一人では無理なのである。

私は告知等と平行して、処分するための本を選び出さなくてはならない。当初は、本棚と本棚のあいだの通路を、奥の壁から山と積みあげて身動きが取れなくなっている個所の本を、とりあえず運び出すことを考えた。しかし、それがすでに相当量あり、それを運び出してとりあえず置くための場所が必要になる。その時点では、その場所さえ、床が本の山で埋めつくされ、確保できないでいた。

薄紙をはがすように、というのは病気が快癒するときの表現だが、これだけ蔵書が溜まると、すでに「病気」。まずは「薄紙」の方から、どんどん段ボールの箱に入れて、作業するための場所を作ることを考えた。

今回、雑誌や大型本の方はまったく手がつかず、基本は単行本と文庫である。文庫は壁二面に文庫専用の本棚があり、三本のスチール本棚には、裏表から二列でぎっしり詰め込んである。その本棚の前には、床から積みあげた文庫の壁がすでに幾層にも重なっていて、後ろにある本は取れなくなっていた。これも何とかしなくてはならない。

何を残し、何を売るかについては、これといった展望はなかった。本の山を目の前に、一冊いっさつ、これは要る、これは要らないなどとやっていた日には、時間がいくらあっても足りない。処分の要諦は「ううん……」ではなく「えいやっ！」だから、勢いをつけて本の壁を崩していった。

最終的には、燃えたと思えば気がすむ、という心境になれるかどうか、だと思った。四十代では、まだ無理だったかもしれない。五十半ばという年齢が、この心境に至る後押しをしてくれる。もう、そう長くは生きられないんだぞ、と。

単行本では、落語を含む芸能や放送関係の本、東京・大阪の都市研究、古本を含む広く出版関係の本、苦労して収集した軟派随筆の新書群、ユーモア小説のコレクションなどは

そのまま手つかずに残した。

あと、これは職業的もの書きとしての特殊な理由だが、執筆中の本のテーマが、地方から上京してきた文学者、および上京する主人公の小説だったために、該当する作家の作品や、彼らについて書かれた評論、明治、大正、昭和の時代背景を知るための資料本なども、とりあえずは手放せないでいた。

一時期、かなり力を入れて集めた、山に関する本はこの際、丸まる処分することにした。とくに文庫は、岩波、中公、平凡社ライブラリーを中心に、相当まとまったコレクションになっていたが、未練はなかった。棚一つ分がこれでごっそり空いた。どこかで思い切った荒療治をしないと、蔵書なんて、そう簡単には減らないものである。

●段ボール箱の確保

選び出した本を地下から一階へ、またそこから車に乗せて運び出すことを考えると、ヒモで縛るより、段ボール箱に入れたほうがいい。また、古本市会場となるギャラリーには本棚がない。展示用に購入したという、四角い木のボックスは二十個ほど用意されていて、これを本棚に転用できるが、それでも二千五百から三千冊を並べることを考えたら、とても足りない。段ボールの箱は、うまく使えば、本を入れてそのまま売ることができる。「一箱古本市」は、基本、段ボール一箱分の本を並べて売るという発想で始まった。

さて、そうなると段ボール箱の確保だ。これまで、引っ越しするたびに、近所のスーパーへ何度も通い、段ボール箱を分けてもらって、貯めて貯めてという作戦を取った経験があるから、慣れていると言えば慣れている。

二度か三度に分けて、会場まで運搬するつもりだったので、すべてを収納するための数は要らない。会場へ運んで、そこで本を出して、また空になった段ボール箱を持ち帰って再び使えばいい。

とはいっても、ひと箱に入る本の量は意外にしれている。大きめのミカン箱級なら、単行本で五十冊近く入るかもしれないが、ひどく重いし、本を並べるのには適さない。少し小ぶりになると収容能力は落ち、せいぜい三十冊から四十冊のあいだぐらい。当然ながら文庫だとその数倍は入る。そう考えていくと、最低でも五十箱は用意しないと仕事にならないぞ、と覚悟した。

さあ、それからは家族で買い物へ行くたびに、レジを通った脇に、買い物した商品を入れて持ち帰るために用意された空の段ボールを使うようにした。大きめの箱に小さめの箱をすぼりを入れて、一度に二個確保するなど、涙ぐましい努力が続く。それでもとうてい足りない。今度は、店員に「段ボールの箱を少したくさん目にいただきたいんですが」と聞いてみるようになった。みな、意外に親切に、店舗裏のストックに案内してくれる。

私は学生時代、長くスーパーで働いていたので、商品ストックがカーゴに積み上げられた店舗裏の光景は見慣れている。ゴミに出すための段ボールは、別にカーゴに積み上げら

れているはずだ。まるで、従業員のように、迷わずスタスタとゴミ用の段ボールを見つけ、さっさと手際良く、脇に十から二十ほど抱え込んで、店員に礼を言って帰っていった。

そんなこと、手際よくても、ふだんの生活ではほとんど役に立たない。しかし、スーパーでバイトしていたことが、段ボール箱確保に役立つとは思わなかった。おかげでしばらくは家中のいたるところに段ボール箱が……。

しかし、段ボール箱には、さまざまなサイズがある。青果で使われる底の浅いタイプはダメだし、レタスや葉物を入れる箱は大きすぎて、しかもちょっと柔だ。

いろいろ試した結果、本の運搬には、各種飲料の二リットル六本入りペットボトルの箱が最適だという結論に至った。丈夫さ、運びやすさ、重量、そして本を立てて並べるときの使い勝手も申し分ない。とくに文庫はタテ三列にぴったり収まる。途中から、なるべくこのタイプを狙って、スーパーの裏方をうろつくようになった。

いい大人が、夜のスーパーで段ボールを両脇に抱えて右往左往する姿は滑稽だが、本の処分とは多かれ少なかれ滑稽を避けられない行為だと早いうちに気づくべきだ。

●値付けがひと苦勞

そうして作業をすすめて、とりあえず四十箱分ほど、処分するための準備はできた。会場までの運搬はどうするか。最初は、レンタカーでも借りて、助っ人を募集して、一日がかりで数回往復すればいいと考えた。

十松くんに相談したら、うちの車を使ってくれていい、という。後部座席を倒せば、かなり広いスペースとなる大型のセダンを所有していて、本を運ぶのにはうってつけの車だ。ありがたく使わせてもらうことにした。

こうして一度目は、一人で家から会場まで本を運びこむことにした。駐車場に入れて、どんどん本の入った箱を会場となる畳の部屋へ運び出す。すべて運び入れた時点で、箱を開けて本を外へ出す。空になった箱は、また本の運搬に使うから、底に貼ったガムテープは剥がさない。

さらにもう一度、家から会場へと同じように本を運び入れた。初日に運んだのが、四十箱分はあったろうか。季節は真夏だったが、「ビブリオ」にはクーラーがあったからありがたい。なにしろ、それからは畳の部屋に籠って、黙々と値付け作業が待っているのだ。

これまでも、三鷹「上々堂」に貸し棚、「一箱古本市」などで本を売ってきたから、値付け作業そのものには慣れている。しかし、それらはせいぜい五十冊どまり。今回は、最終的に三千冊近くになる。一冊に十秒かけるとして、ぶっとおしでやっても八時間から九時館はかかる計算だ。人間の集中力はそんなに保たない。これは大変だぞ、とやっと思いついた。

それでもその日の夕方までに、なんとか五〇〇冊近くの値付けを一人で済ませた。後日、再び訪れて値付け。一冊いっさつを見て、瞬時に値段を書き込み、本のいちばん後ろのペ

一ジに挟んでいく。基本は五百円以下。百円から三百円という価格帯をなるべく多くする。これが各種古本市に出入りした者としての経験則から割り出した、よく売れる値付けだ。

定価の半額をつけて売れる本というのは、非常に特殊な哲学・思想、歴史、美術などの専門書など。しかも帯付きで状態がいいものに限られる。先行して成功した「羽鳥書店まつり」という一人古本市には、これら三ツ星の本が大量に投入されていた。私はもともとそんな本はあまり蔵書していない。ほとんどが文芸書および雑書の類である。

あるいは、半額以上に上乗せできるのは、いま古本屋で非常に人気のある作家たち。後藤明生、田中小実昌、小沼丹、小島信夫、野呂邦暢、洲之内徹、山田稔などなど。これも気合いを入れた処分ですでに相当数を減らしている。

文庫化された単行本というのも極端に値が下がる。そうなると、どうしても五百円以下の本をどれだけ増やせるかが、短期決戦の勝負どころとなる。自分ならこの値がついていたら客として買う、というのが最終判断として有効だった。

逡巡や後悔や未練、少しでも儲けたいというスケベ心は禁物で、とにかくさっさと値付けを済ませないと、まだまだやることは山のようにあるのだ。おまけに運び入れる本の量はまだ半分。前途は多難である。

●ついに助っ人登場

このあと日を置いて、今度は知り合いの助っ人六人を引き連れて、また同じほどの量の本を運び入れた。冊数をカウントしていなかったが、最終的にはおそらく二千五百から三千冊はあったと思われる。

今回、この酔狂な試みに、どれだけの人がボランティアで手を貸してくれるか。まったく読めなかった。ブログ等で募集したものの、初動ではあまり反応がなく、自分の人望について疑いさえもった。そんななか、仲良くしているライターのHくんが、「岡崎さん、ぼくやりますよ。なんでも言ってください」とメールしてくれてきたのが、非常にうれしかったし、以後の支えとなった。

結論から言えば、古本市開催の三ケ日を含め、連日、人出は余るほど足りて、本当にみんながよく働いてくれた。今回、「一人古本市」をやってよかったと思えた最大の成果が、この「人」だった。古本市に来てくれた知り合いの編集者が、首からスタッフ用のタグをぶらさげた面々を見て、「どうしてこんなに助っ人がたくさんいるのですか？」と聞いてきたくらいだった。とにかく、ありがたいことだった。

第二弾の運びこみには、不動産業を営むAくんが営業用の自家用車に乗ってきてくれた。こちらにもトランク等に多少の本は積みそう。すでに、運ぶための本は段ボール箱に詰め込み、一階のガレージ近くの床に集めてあった。あとは運び出すだけだが、せっかく来てもらったのだからと、先に到着した数名には、魔窟と化した地下の書庫を見してもらった。

人が通れるスペースを残して壁面に積みあがった階段を下りるところから、「ひゃあ」「こ

れはちょっと」「うわあ」と歓声が挙がる。その歓声は、蔵書の苦しみと格闘した現場である地下書庫に着いたときにひととき大きくなった。

いち早く助っ人の名乗りを挙げてくれたHくんは、我が家に過去、二度来てくれたことがある。うちの蔵書事情もその増減の変遷もよくわかっている人物だ。ひさしぶりに地下の乱雑をきわめた書庫を見てもらったが、「ぜんぜん減ってないじゃないですか」と、嘆いていた。あとで、今回持ち出した本は、全体の「せいぜい全体の三%程度」と彼は踏んでいたが、まさか、そんなことはないだろう。なにしろ二千五百から三千冊は減らしたのだ。

しかし、それで全体の一割減ったと主張するのも、ちょっとうぬぼれが過ぎるかもしれない。五%から七%のあいだぐらいか。となると、いつも「どれぐらい本をお持ちですか」と無謀な質問を受けるとき、とりあえず答えとして用意していた「ざっと二万冊」は、どうも危ない。三千冊減らして一割減った気がしないなら、実際にはもっとありそうに思えてきた。

気の置けない助っ人の手を借りて、第二弾の運び込みはあっさりとなり、またもや値付けの苦しみが待っていた。今回は値付けも助っ人の手を借りた。誤植があつて無駄となった、「一人古本市」チラシを切って作った短冊を大量に用意。助っ人のうち五人を目の前に座らせ、端から順に「きみは百円」「次が二百円」と五百円まで担当を決めた。それでどうするかと言うと、本の山から一冊取り出しては、私が瞬時に五種類の値段を判断し、「百円」「二百円」と、担当の人物の前にそれを放り投げた。彼らは短冊にその値段を書き込み、本に挟み込んだ。五百円以下にはとても落とせないという本については、あとで自分でつけるため、脇へはじいた。

一冊にかけた時間はほんの数秒。かぎりなく一秒に近い。この方式で、どんどん山を減らしていった。

これは単行本の話。古本好きにとって目玉となる「ちくま文庫」「講談社文芸文庫」「中公文庫」も、今回の「一人古本市」では、思い切って大量投下した。「ちくま」についてはすでに値付けが終わっていた。残る「講談社文芸」「中公」については、助っ人のなかから、早稲田大学文学部五年生のFくんを指名。彼に「修業」の名のもと、値付けをまかせた。

というのも、このFくん。私が常時出店している雑司ヶ谷商店街での一箱古本市「みちくさ市」に、客としてやってきて言葉を交わすようになったのだが、将来は古本屋（それも店売り）を目ざしているというのだ。古本にはまったのはここ数年のことらしいが、すでに我々と普通に古本の話ができるレベルに達していた。恐るべき二十代であった。

「講談社文芸」と「中公」は品切れが多く、その品切れ本にもランクがあつて、古書価格はまちまち。とても定価の半額とか、三分の一というつけ方はできない種類の文庫なのだ。どれだけ、本のことを知っているかがためされる文庫だとも言えて、「修業」中の身にまかせるにはぴったりの商品だ。

最後の方は手伝ったが、うんうんうなりながら、一人離れた場所で彼は値付けをしてい

た。私はあとでそれをチェックする、というようなこともしなかった。まかせることが「信頼」だと思ったからだ。

●本の陳列

「ビブリオ」は、基本的に畳の部屋にパーテーションを置いて、そこに絵を陳列するかたちのギャラリーだった。だから本棚はない。そのかわり、絵以外の造型や雑貨などを陳列するため、ブロックの木箱二十数個が物置きに収納してあった。

これを畳の部屋に運び込んで、上下をジョイントでつなぎ、三段の本棚とした。これは絵本なども入るサイズで、文庫には使いづらい。そこで、自宅から四段の文庫用本棚を二本運び込んだ。それでも本を並べるのには、まったく足りない。このとき役立ったのが、運搬用に大量に捕獲した、二リットルペットボトル六本用段ボールだった。再びこの上部開閉部をガムテープで封印。その銅の真中あたりを切断し、二つの箱を作った。これを畳の上横に置けば文庫、新書サイズがうまく収まる本箱となる。

また、ブロックの木箱を並べた三段の本棚の上に並べれば、雑誌サイズまで収納可能な本箱に変身するのだ。これは重宝した。ペットボトル用以外の段ボール箱で同じようなものを作ったが、強度に難があり、翌日見たら、崩れ落ちていた。

ブロック木箱の組み立てと設置、ペットボトル箱の切断と配列、商品としての本の陳列も、すべて助っ人たちにまかせた。ここで非常に重要なのは、彼らが、単なる友人ではないこと。日ごろ古本屋へよく通い、自分でも相当量の蔵書を持ち、一箱古本市に出店している者がいたりで、つまり本の扱いによくよく手慣れた者たちであることだ。

たとえば、これを学生アルバイトを募集して同人数集めたとしよう。古本屋へ通ったり、部屋に蔵書を溜め込んだり、一箱古本市で古本を売った経験のある者がそこに混じっている可能性は非常に低い。本の扱いに慣れていない者である可能性が高い。すると、おそらく、一挙手一投足、いちいち「これはああして」「これはこういうものだから、ここではなく別にして」など、私が指導し指示を出さなければならない。

そんなことに神経を使うぐらいなら、最初っから自分一人でやった方が早い。その点では、ここに集った助っ人たちは、惚れ惚れするぐらい頼もしい。銘々が勝手に判断し、もくもくと作業を続けて、非常な短時間で、設置が終わった。

午後から始めて、運搬、値付け、本棚の設置、陳列が終わったのが午後五時くらい。私は、正直言って、作業の質量からして夜の九時、十時までかかることを覚悟していたので、その早さは拍子抜けしたほどだった。

この日の助っ人は、人数は六人だが、私の目には「七人の侍」に見えた。

●有能なスタッフ確保が必需

そして七月十四・十五・十六の三連休、「一人古本市」が始まった。時間は午後一時から

六時までの五時間。もちろん私は現場につきっきりの長丁場だ。本当にお客さんが来てくれるかどうか、開始時間まで心配されたが、三日ともほとんど途切れることなく、会場にお客さんがいた。この一点で、まずは大成功だったと思う。

玄関脇にある台所を帳場として、古本市会場からは、ここを通過して精算して出ていってもらう、という流れにした。帳場に据えた大机には基本、三人が常駐。本を受け取り短冊を取る係、それを計算して、合計金額を用紙に書き込む係、合計金額を精算するレジ係と分担を決めた。このレジシステムの流れを作ってくれたのが、シトロンブックスの溝口さんだった。

当日、ボランティアスタッフとして参加してくれた溝口さんは、私とは初対面。「シトロンブックス」という雑貨と絵本のウェブショップを主宰し、ときどきイベント等出張して対面販売もしている。ギャラリーのオーナー・十松くんとは知り合いであることから、今回、手伝ってくださることになった。

溝口さんは、かつて国立にあった絵本専門店「ペンギンブックス」の店員だったのだ。なにかと国立とは縁が深い人で物販にも慣れている。これは頼もしい助っ人であった。

二日目は、雑司ヶ谷で古本と雑貨を商う「旅猫雑貨店」店主の金子さん、三日目は、もと書店員でいまは池袋で古本屋を開いている増田さんなど、連日、物販に慣れた女性が帳場にいたことも心強かった。八月には同じ場所を使っての一箱古本市「国立コショコショ市」を開催予定の主宰者で、国立で余暇を使った古本屋を女性二人で経営する「ゆず虎嘯」も、初日と二日目に分けて、登板してくれた。

こうした個人による「古本市」を開催する場合、もちろん場所、そして売るべき「本」が必要なのは言うまでもないが、運営するための有能なスタッフをどれだけ確保できるかが、重要だと思いつく思い知らされた。「羽鳥書店まつり」は、古書ほうろうを始め、「一箱古本市」のスタッフ、古本屋を中心とした「わめぞ」グループなどが手を貸したからこそ、やれたイベントであった。

私の場合は、古本ライターと名乗り、古本屋さんとのつきあいがあり、各種講座などで古本について喋り、さまざまな「一箱古本市」に出店するなど、日ごろから「古本」をめぐる活動をしてきたことが、人脈づくりにつながったのである。

いきなり、違うところから出てきて、一人で古本市を開きますと宣言しても、なかなか難しいかもしれない。

●古本屋の売上げが落ちた？

初日は開店時間前から、入口付近で数名の古本猛者らしき人物の姿が見え始め、「では今から開始します」の声をかけると、たちまち会場には、あの古本市、あの古本屋で見かけたような方々が、一斉に飛び込んで来て物色を始めた。この意欲、この元気。見習わなくてはならない。各種古本市に一番で駆けつけ、大量に買って行かれる、この業界では有名

な男性も大量に買い上げてくださった。

開始一時間もする頃から、レジは混み出した。かといって、そのため混乱するというともなく、まるで順番を調整したかのように、スムーズに精算作業は進んでいった。

なかには、買わずに出ていくというお客さんもいたが、数は少なかった。そんなお客さんにも、帳場に座った助っ人さんたちが、「ありがとうございます」と声をかけていたのも印象的だった。やはり、買わずに出るというのは、どこか後ろめたいもの。その心理的負担を和らげる意味で、この声掛けはいい。

知り合いの顔も大勢見たが、それと同じ数、いやもっと多いぐらい、これまで面識のない一般のお客さんもいた。オープン前で、まだそれほど知られているはずのない民家ギャラリーで、素人が開いた古本市を、どこでどう知って来てくださったのか。地元新聞や、三大新聞の一部地方版に、開催の旨が告知されたようだが、ブログやツイッター、ロコミによる広がりも集客につながった。これは、人知れず告知してくれた協力者に感謝だ。

とにかく本はよく売れた。用意した二千五百から三千冊のうち、半分以上は人の手に渡っていったのではないだろうか。拙著『雑談王』（晶文社）、「赤旗」連載「上京する文學」で使った、直筆のイラストカットも展示販売。国立の増田書店の協力で、私の著作を五種類ほど、並べて新刊として売った。

それらはすべて、私の身体を通ったものたちで、それがこうして人前に並べられて、お金と引き換えに人の手に渡っていく。そんな光景を、ちょっと不思議な思いで見ている。

あとでひとに聞いたら、中央線の某古書店が、「オカザキさんの『一人古本市』のせいで、連休三日間、売上げが落ちた」とツイッターで書いていたというが、まさかそれほどでもないだろう。

売れ残った本は、また家に持ち帰ると「蔵書の苦しみ」の軽減にならない。会期が終わったあと、すべて本棚から出し、値札を取り去って畳の上に積みあげた。後日、知り合いの古本屋さんに来てもらって、そっくりそのまま処分した。一度、家から出た本は、そのままもとへは戻らなかったのである。

● 畳の部屋への郷愁

民家ギャラリー「ビブリオ」は、オーナーの十松くん家族がその昔、暮していた住居で、その後、隣接する土地に二世帯住宅を新築し、そちらへ移っていった。その後は、他人に貸していたのだ。部屋数は一階と二階あわせて、大小で六つはあり、ギャラリースペース以外の部屋も使用可能というのが使い勝手がいい。一階奥の間が休憩室として使われ、飲みものや差し入れのお菓子などがテーブルに並べられ、帳場の手が足りているときは、私もこちらでけっこう休んでいた。

畳の部屋で、座椅子にもたれて、お茶など飲んでくつろいでいると、どこかの旅館にでも来たみたい。それは異口同音に、この部屋を使った人たちがもらす感想だった。ひとと

き、お客さんからの視線から逃れて、神経を休ませるスペースがあるのは有難かった。夜は、ここが打ち上げの宴会会場となったのだ。

一方、帳場からは、古本市会場がよく見える。

お客さんたちは、みな、寝そべらんばかりの低い姿勢で、どっしり尻を落とし、古本と対峙されていた。なかには一時間も滞留された方もいた。子どもを連れてお父さん、お母さんもいて、ふだんの古本市なら、足手まといになるところ、適当にほったらかしにしておけるのも、畳の部屋のいいところ。おおむね、冊数にしては一人当たりの滞在時間が長かった。これも「畳」のおかげだろう。

この「畳」の力が、「ギャラリー ビブリオ」の大きな特色となっていくはずだ。

来てくれたお客さんのなかで、一つサプライズがあった。私の高校三年の同級生が、ひょっこり顔を出してくれたのだ。名前を告げられたとき、御互い、三十八年もの時間が流れていたのだが、たちまち高校時代の顔、名前が蘇り、「おお、N！」と叫んでいた。聞くと、横浜の会社に単身で出向中で、今回の「一人古本市」のことを知ってくれたのだという。

高校卒業以来、会うこともなく、年賀状のやりとりをする仲でもなかったから、それだけ再会の衝撃は大きかった。

「一人古本市」がもたらした、意外な副産物だった。